

立山町文化財調査報告書 第32冊

新瀬戸古窯

—県営土地改良総合整備事業上金剛寺地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査—

2001年 3月

立山町教育委員会

序

文化財は祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく、現在の文化を理解するためにも重要なものです。なかでも埋蔵文化財は地域の歴史に深く関係しており、郷土をよりよく理解するための鍵であるといえましょう。

このたび調査の行われた新瀬戸古窯跡は、「越中瀬戸焼」の古い窯跡の一つであり、昭和60年に遺跡詳細分布調査によってその存在が確認されたものです。この窯は、他の窯場が全て段丘上に立地する中で、唯一崖を利用して段丘下に築かれており、その特異な立地から研究者の間では注目されながら、内容はほとんど不明のままでありました。

「越中瀬戸焼」は、天正年間に加賀藩前田家によって尾張国瀬戸村から招かれた陶工「小二郎」が始めたとされており、四百年余の歴史を有する富山県を代表する伝統工芸であります。しかしながら、その研究は充分に進展しているとは言えず、特に近年窯跡等の発掘調査の機会が減ったこと也有って、生産地に関する研究は立ち後れ気味でありました。

今回の調査においては窯跡や灰原などの生産址を直接調査することは出来ませんでしたが、それでも複数の操業が推定されるなど、新たな発見がありました。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

終わりになりましたが、調査実施にあたり御協力をいただいた富山県と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

平成13年3月

立山町教育委員会
教育長 堀 田 實

例　　言

1. 本書は土地改良総合事業に先立つ、富山県中新川郡立山町新瀬戸古窯の発掘調査報告書である。
2. 調査は立山町教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成12年7月10日～平成12年7月17日までの延8日間に行った。その後、報告書作成は平成13年3月30日まで行った。発掘調査面積は約145m²である。
4. 事務局は立山町教育委員会に置き、立山町教育委員会社会教育課主任三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長松井君子が総括した。
5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主任三鍋秀典と同臨時調査員渡辺樹である。
6. 調査にあたり、富山県教育委員会文化財課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示をいただいた。また、宮田進一氏（富山県埋蔵文化財センター副主幹）、田中學氏（富山大学大学院生）に御教示をいただいた。記して謝意を表します。
7. 遺物の注記は「T S K」とし、次にグリッド名・層位・日付の順に付した。
8. 遺物整理・実測・製図は三鍋・渡辺が中心となり、田中幸生（立山町教育委員会臨時調査員）、中谷正和（富山大学大学院生）、川端良招・不動美穂・安瀬佳織（富山大学学生）が協力した。
9. 本書の編集・執筆は三鍋・渡辺が担当した。

目　　次

第1章　遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2章　調査に至る経緯	1
第3章　調査概要	4
第1節　立地と層序	4
第2節　遺構	4
第3節　遺物	4
第4章　調査成果	9
参考文献	
写真図版	

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図　調査区区割図	3
第3図　遺物実測図	5
第4図　遺物実測図	7
第5図　遺物実測図	8

表　目　次

表1　擂鉢口縁部形態の地区別組成比	9
-------------------	---

第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北21km、面積は308km²である。

地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘、北西部が平野部である。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4区分できる。

まず、標高400m以下は暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに統いて標高600m～700mまでは暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるコナラ・クヌギ・クリ類の成育帶で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物が育つ場もある。

さらに標高1,500mまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は亜寒帯針葉樹林帯となっている。

このような地形の中で、新瀬戸古窯は、町東北部を南北にのびる上段段丘の南西側段丘崖に立地する。崖の傾斜は急で、崖上と崖下の比高差は約25mある。今回の調査区は崖下に位置し、標高は約129mを測る。

周辺は古代以来的一大窯業生産地であり、多数の窯業関連遺跡が存在する。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った遺跡に関連のあるものとしては、米道遺跡（縄文・中近世）、末谷口遺跡（古墳～近世）、上末古窯跡群（古代）、越中瀬戸古窯跡群・孫市窯・甚兵衛窯・陶片塚（近世）などがあげられる。

第2章 調査に至る経緯

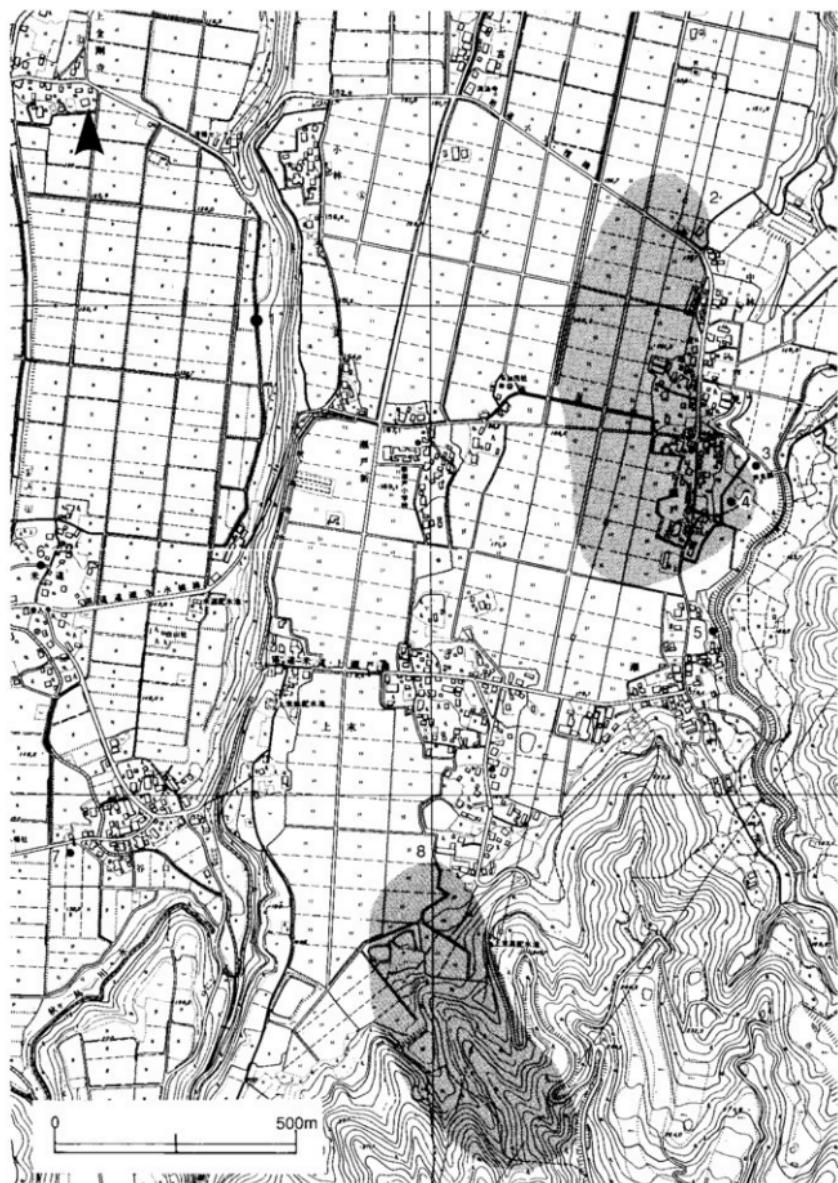
新瀬戸古窯は、昭和60年に立山町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査によってその位置が明らかになったものであり、古文書等から越中瀬戸焼の初期窯跡の一つである「伊兵工窯」ではないかと考えられていたが、分布調査によって得られた資料は僅か26片とごく少量であり、その後調査も実施されなかつたため詳細は不明のままであった。

平成10年11月、県営は場整備事業の工事施工に伴い富山県富山農地林務事務所より埋蔵文化財調査の依頼があり、これを受けて立山町教育委員会が平成11年9月～11月に試掘調査を行った。

調査の結果、近世に属する越中瀬戸焼窯跡の窯体・焚き口・灰原などの遺構と遺物を多数検出した。

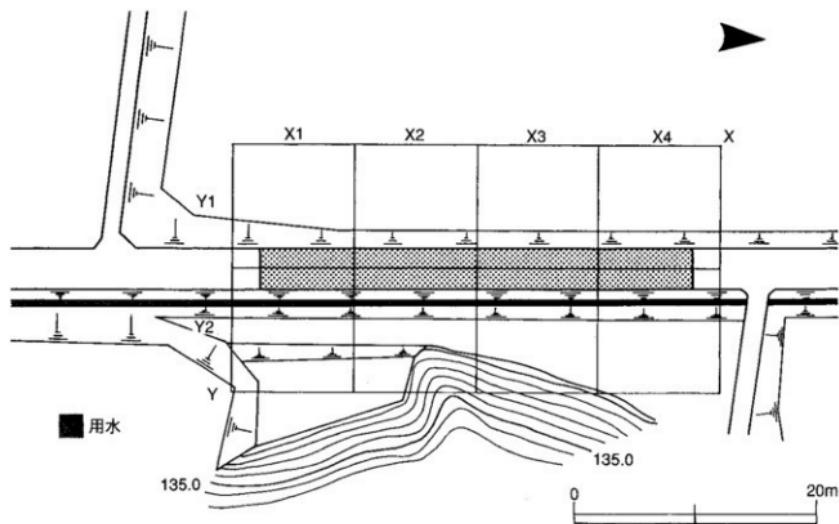
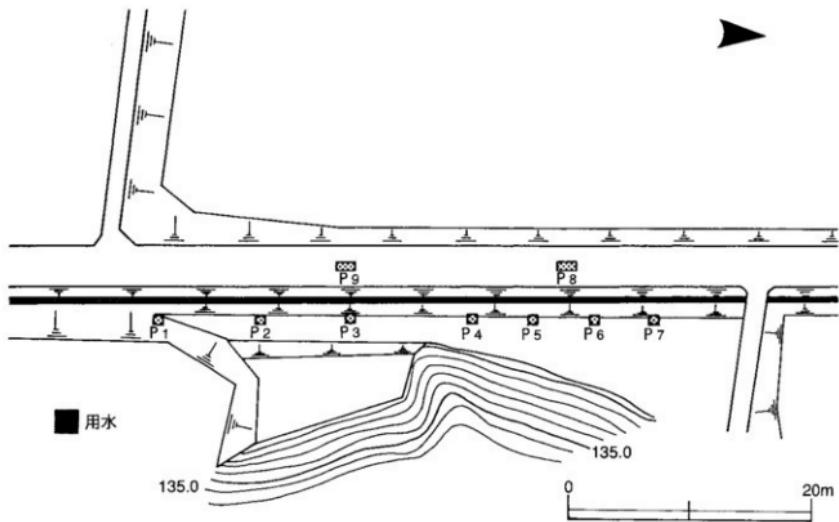
この結果をふまえ、立山町教育委員会と富山県富山農地林務事務所が協議・調整を行い、農道の舗装整備にかかる部分を対象として平成12年度に記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成12年7月10日から7月17日の延8日間にわたって実施された。調査面積は約145m²である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

- 1.新瀬戸古窯
- 2.越中瀬戸古窯跡群
- 3.孫市窯
- 4.基兵衛窯
- 5.胸片塚
- 6.米道遺跡
- 7.末谷口遺跡
- 8.上末古窯跡群



第2図 地形と区割図

第3章 調査概要

第1節 立地と層序（第1・2図）

遺跡は、富山地方鉄道釜ヶ瀬駅の東1.8km、立山町瀬戸新地内に所在する。一帯は、常願寺川の旧扇状地が隆起してできた上段段丘の西側にあたり、西を柄津川、東を白岩川という中規模河川が北流する。

遺跡は、段丘の西側段丘崖の崖上から崖下にかけて立地する。段丘上は平坦で、北に向かってゆるやかに傾斜するが、崖の傾斜は急で、段丘の比高差は約25mを測る。調査区は標高約129mを測る。

層序は客土の單層である。調査区は農道として利用されており、農道を造る際に周辺から採取した土と考えられる。

第2節 遺構

調査区である道路敷自体が、周辺に存在する埋蔵文化財包含層を利用して造られたものであるため、遺構らしきものは検出されなかった。

第3節 遺物

遺物は、製品と窯道具に分けられ、製品には、碗類・皿類・鉢類・壺などがある。

碗類（第3図1・2、第4図21～26・43・45）

碗類には、天目茶碗・丸碗・筒形碗・杯がある。

天目茶碗（第4図21・43）口縁端部を外反させるもの（21）と口縁部が直立するもの（43）があり、いずれも内外面に鉄軸を施す。21は口径10.0cmを測る。43は口縁部に匣鉢の破片が溶着しており、口径は9.0cmを測る。

丸碗（第4図22～24・45）口縁端部を内湾させるもの（22）と口縁部が直線的に開くもの（23）がある。22は鉄軸を施し、口径は10.0cmを測る。23は灰釉を施し、口径は11.0cmを測る。24・45は底部破片である。削り出し輪高台であり、高台付近は無釉である。24は高台を削り出した後にロクロナデを行う。灰釉を施し、高台径は5.6cmを測る。45は鉄釉を施し、高台径は5.0cmを測る。

筒形碗（第4図25・26）薄手で体部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がるものの（25）と、厚手でゆるく屈曲しながら立ち上がるものの（26）がある。内外面に鉄軸を施す。25は口径8.6cmを測り、26は9.6cmを測る。

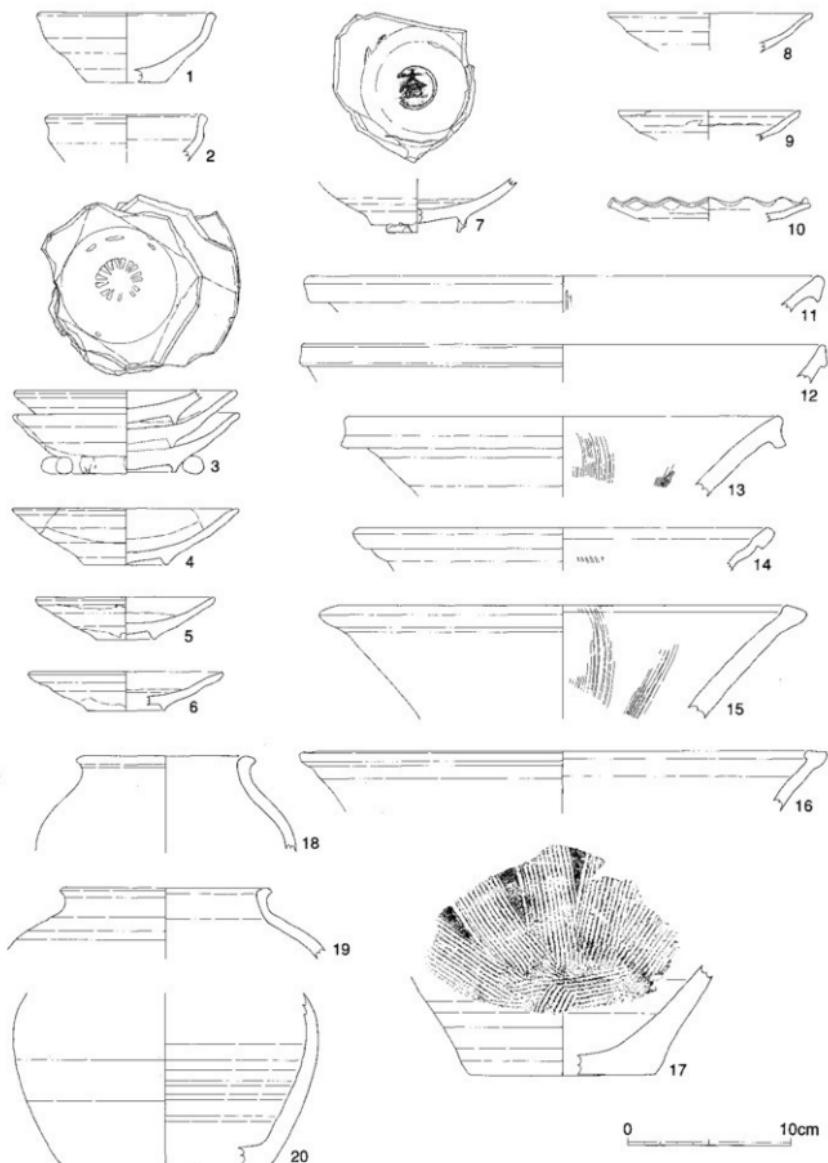
杯（第3図1・2）平底で体部が内湾気味に外傾し、口縁部が屈曲して立ち上がり、角張った端部を持つもの。1は内外面とも無釉であり、外底面は回転糸切り痕を残す。口径9.4cm、底径4.8cm、器高4.3cmを測る。2は外面のみ鉄釉を施す。口径は10.4cmを測る。

皿類（第3図3～10、第4図27～32・44）

皿類には、丸皿・端反皿・ひだ皿・中皿などがある。

丸皿（第3図3～9、第4図27・28・44）体部下半から口縁端部まで直線的にのびる、削り出し高台の内禿皿である。44は口縁端部が肥厚しやや内湾する。6・7・44は内底面に軸止めの段を持つ。5・9・27は灰釉、6・7・8・28・44は鉄釉を施し、3・4は灰釉と鉄釉を掛け分ける。いずれも内外底面は無釉である。3は丸皿3枚を重ねた状態で溶着している。最上部の皿の内底面にも重ね焼きの跡が残っており、少なくとも4枚以上を重ね焼きしたと考えられる。また、最下段の皿の高台付近には輪ドチが溶着している。上部2枚の内底面には、車輪の印花を押捺する。7は内底面に「大■」の印花を押捺するが、部分的に押捺し損なっており下の文字は不明である。口径は10.8～12.4cm、13.4～14.0cmに二分でき、高台径は3.6cm、4.6～5.2cm、6.4cmの3つに分けられる。器高は2.3～3.5cmを測る。

端反皿（第4図29）体部が若干丸みを持って立ち上がり、口縁部が端反風になる内禿皿である。鉄釉を施し、内外底面は無釉である。口径は10.6cmを測る。



第3図 遺物実測図 5. P3 8~10・17・19. P4 1~4・6・11~16・18・20. P5 7. P6 (S=1/3)

ひだ皿（第3図10）口縁端部をつまんで輪花風に仕上げる内禿皿。灰釉を施し、内底面と外面下部は無釉である。口径は12.4cmを測る。

皿（第4図30-31）平底で内外面とも無釉の皿である。30は、ねかせ気味の体部に端部をやや外反させた口縁部が付く。外面は底部から体部にかけてロクロケズリを行う。口径12.0cm、底径6.6cm、器高1.8cmを測る。31は体部から口縁部まで直線的にのびる器形で、端部を丸くおさめる。外底面は回転糸切り痕を残す。口径11.8cm、底径4.8cm、器高3.1cmを測る。

中皿（第4図32）体部がやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。灰釉を施すが、大部分が剥落している。口径は17.8cmを測る。

鉢類（第3図11～17、第4図33～38・45～47）

鉢類は向付・擂鉢などがある。

向付（第4図33・45・46）口縁部が屈曲して直立し、中程からやや外反するもので、角張った端部を持つ。高台は削り出し高台である。鉄釉を施し、内外底面は無釉である。46は部分的に灰釉が落とされる。45は、向付の上に丸腕を重ねた状態で溶着している。46は内底面に14弁菊の印花を押捺する。口径9.2～10.4cm、底径4.6～5.2cm、器高3.0～3.2cmを測る。

擂鉢（第3図11～17、第4図34～38）擂鉢は、宮田進一氏の分類（宮田1988）によって口縁部の形態から細分した。A1～4類、B1・2類がある。すべて全面に鉄釉を施す。

A1類（第3図11・12、第4図34）口縁部の縁帯が垂下するもの。11は内面に卸し目が施されるが、単位は不明である。口径は26.0～31.8cmを測る。

A2類（第3図13、第4図35）口縁部の縁帯を外方につまみ出すもの。13は口径26.4cmを測り、卸目は2.5cmの原体に8条である。35は口径29.8cmを測る。内面に卸し目が施されるが、単位は不明である。

A3類（第3図14）口縁部が屈曲し、縁帯がほとんど垂下しないもの。口径は25.0cmを測る。内面に卸し目が施されるが、単位は不明である。

A4類（第4図36）口縁部が屈曲して直立し、端部がやや外反するもの。口径は29.4cmを測る。内面に卸し目が施されるが、単位は不明である。

B1類（第3図15）折り返した口縁端部上面が平坦なもの。口径は27.4cmを測り、卸目は2.5cmの原体に8条である。

B2類（第3図16、第4図37）折り返した口縁端部上面が少し窪むもの。16は口径30.0cmを測り、37は28.6cmを測る。

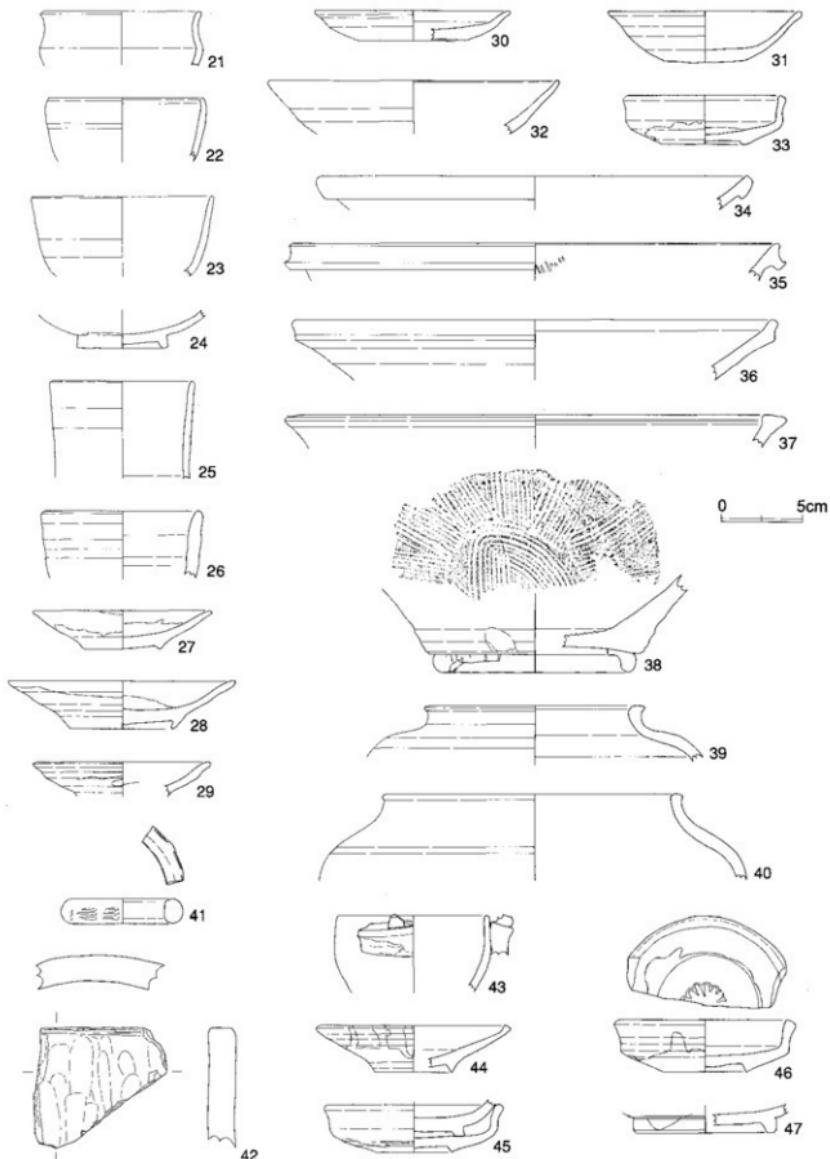
17・38は底部破片であり、外底面は回転糸切り痕を残す。体部内面は左回りの放射状に、内底面は不定方向に卸目が施される。体部内面には重ね焼き痕が残る。17は底径11.4cmを測り、卸目は3.4cmの原体に12条である。38は外底面に輪ドチが溶着する。底径13.0cmを測り、卸目は2.9cmの原体に9条である。

鉢（第4図47）47は鉢類の底部破片と考えられる。削り出し輪高台であり、高台付近は部分的に鉄釉が掛かるが、内底面は無釉である。高台径は8.4cmを測る。

壺・その他（第3図18～20、第4図39～42）

壺（第3図18～20、第4図39・40）肩部から頸部にかけてなだらかに屈曲するもの（18）と、肩が張る体部に短い口頭部が付くもの（19・39・40）がある。いずれも口縁端部を外方に引き出し、外面に鉄釉を施す。39は口縁部内面に一条の沈線が巡る。口径は10.0～13.0cmのものと、17.6cmの大型のものがある。20は底部から肩部にかけての破片である。平底で、体部が直線的に開き、肩部付近よりなだらかに内湾する。内外面に鉄釉を施す。外底面は回転糸切り後ナデ調整を行い、無釉である。底径は13.0cmを測る。

蓋置き（第4図41）輪状を呈するもので、全面に鉄釉を施す。外面には3条の横位の短沈線を施す。五徳形の蓋置



第4図 遺物実測図 33・35. P8 21~32・34・36~42. 包含層 43~47. 表様 (S=1/3)

きの台にあたる部分と考えられる。直径7.4cm、器高1.5cmを測る。

平瓦（第4図42）端部を面取りし、凸面にはヘラナデの痕跡が認められる。全面に鋸軸を施し、厚さ1.6cmを測る。

窯道具類（第5図48～58）

窯道具類には匣鉢・匣鉢蓋・輪ドチ・ハリ・支脚がある。

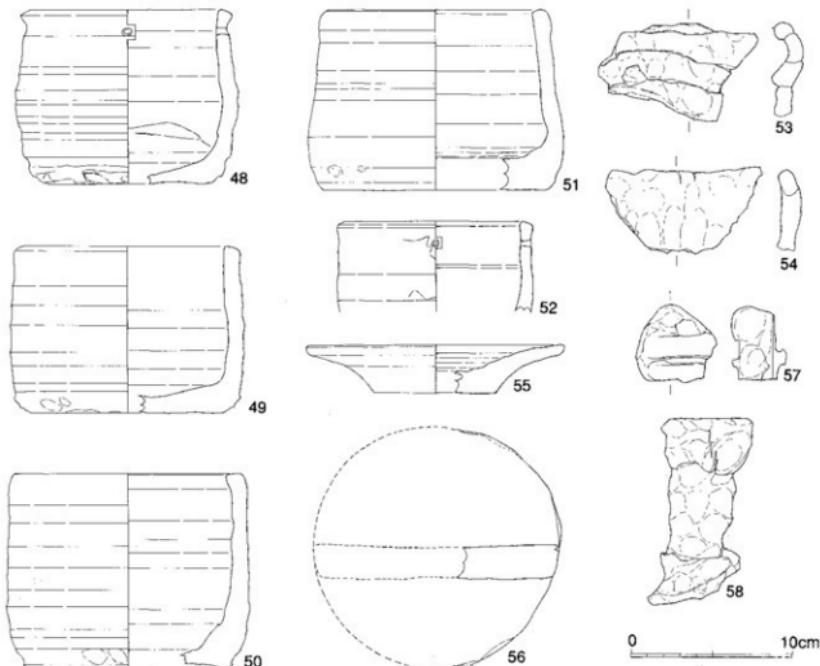
匣鉢（第5図48～54）平底で体部に丸みを持ちながら直立し、筒形を呈する。外底面は回転糸切り痕を残す。48・50は底部中央に向かって器壁が薄くなる。48は鉄軸、49・51・52は鋸軸を施し、50は無軸である。52は外面に灰釉が流し掛けされる。外底面は無釉である。48～51は腰部外面に指圧痕を残す。48・52は口縁直下に1ヶ所穿孔する。口径は10.8～13.2cmを測り、底径は9.6～13.4cmを測る。

53・54は匣鉢に似た筒形を呈する可能性があるため、匣鉢として分類した。いずれも紐状の粘土を重ねたもので、54はユビナデの痕跡を残す。

匣鉢蓋（第5図55・56）外面とも無釉で、皿形態のもの（55）と円盤状のもの（56）がある。55は平底で体部が外方に開き、内面には5つの段がみられる。外底面は回転糸切り痕を残し、内外面とも無釉である。口径15.4cm、底径7.6cm、器高2.9cmを測る。56は両面に回転糸切り痕を残し、無釉である。直径15.0cm、厚さ2.1cmを測る。

ハリ（第5図57）57は積み上げられた匣鉢列などを固定する際に使用されたものと考えられる。高さ4.8cmを測る。

支脚（第5図58）大型品を焼成する際に使用されたものと考えられる。部分的に自然釉が掛かる。高さ11.5cm、棒状部最大径4.1cmを測る。底面の傾斜は約20°を測る。



第5図 遺物実測図 48～50・53・54・58. P5 55. P6 51・52・56・57. 包含層 (S=1/3)

第4章 調査成果

今回の調査で出土した遺物の中で明確に時期を特定できるものはないが、遺物全体の様相からおおよその年代を考えてみたい。調査区となった用水西側において出土した遺物の特徴は以下の通りである。

1. 丸皿の高台は削り出し高台のみであり、口径に対して高台径が小さい。
2. 丸皿の内底面に明確な軸止めの段を持つものが少ない。
3. 鉄軸と灰軸を掛け分ける皿がない。
4. 捣鉢の口縁部は縁帶を外に引き出すA2類が少なく、端部が屈曲して直立するA4類が定量存在する。

これらの特徴は18世紀前半の様相を示すものである。これに対して用水東側（P1～P7）では、基本的には同じような傾向がみられたが、一部にやや異なる様相を持つもののがみられた。

1. 第3図3は、灰軸と鉄軸を掛け分け、内底面に明確な段を持つ。また、口径に対して高台径が大きい。
2. 捣鉢の口縁部は、A2類の割合がやや多く、A4類はほとんどみられない。

このような様相は17世紀第3四半期にまで遡る可能性があり、用水東側では本調査区と比較してやや古い様相もみられる。

以上のことふまえて、今回の調査で得られた新知見は、以下の通りと考える。

①出土遺物の様相は、18世紀前半を中心とすると考えられるが、17世紀後半の様相もみられる。今回の調査区は段丘の崖下にあるが、1976年に行われた段上崖沿いの調査でも18世紀以降の遺物が主体となっており、ほぼ同時期に窯が築造されたと考えられる。

②従来調査区付近には、調査区東側の斜面に単独で窯が存在すると考えられていた。地元の方の話では、調査区に農道を造る際には周辺の土を利用して、遠方からの搬入はない。しかし、今回の調査で出土した遺物は、17世紀後半から18世紀前半までの時期幅があり、調査区周辺には他にも未発見の窯が存在するか、1つの窯で複数回の操業が行われた可能性が考えられる。

しかしながら、今回の調査もその他の越中瀬戸焼の窯と同様に、本格的に発掘調査を行ったものではないため、これらは推論に止まざるを得ない。今後の調査の進展を待ちたい。

表1 捣鉢口縁部形態の地区別組成比

	A1類	A2類	A3類	A4類	B1類	B2類
用水西側	11	3	0	5	1	2
用水東側	14	6	1	1	0	3

A 1類 口縁部の縁帶が垂下するもの

A 4類 口縁部が屈曲して直立し、端部がやや外反するもの

A 2類 口縁部の縁帶を外方につまみ出すもの

B 1類 折り返した口縁端部上面が平坦なもの

A 3類 口縁部が屈曲し、縁帶がほとんど垂下しないもの

B 2類 折り返した口縁端部上面が少し窪むもの

参考文献

- ウ 魚津市教育委員会 1997 「富山県魚津市 出遺跡発掘調査報告書」
- エ 越中瀬戸焼發祥四百年記念顕彰会実行委員会 1988 「越中瀬戸—発祥四百年記念誌—」
- カ 金沢市・金沢市教育委員会 1997 『安江町遺跡』
- サ (財)富山県文化振興財団 1996 『梅原護摩堂遺跡発掘調査報告－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－』
- セ 瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史編 4』
- タ 立山町教育委員会 1977 『立山町史』上・下巻
立山町教育委員会 1979 『富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要』
- 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1985 『立山町埋蔵文化財分布調査報告書』 I
- 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1991 『立山町埋蔵文化財分布調査報告書』 VI
- ホ 北陸中世土器研究会 1997 『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』桂書房
- ミ 宮田進一 1988 『越中瀬戸の窯資料(1)』『大境』12号 富山考古学会
宮田進一 1998 『越中瀬戸の成立と展開』『情報と物流の日本史—地域間交流の視点から—』地方史研究協議会



図版2



図版3

1. 発掘前風景
(南西から)



2. 調査区全景
(北から)

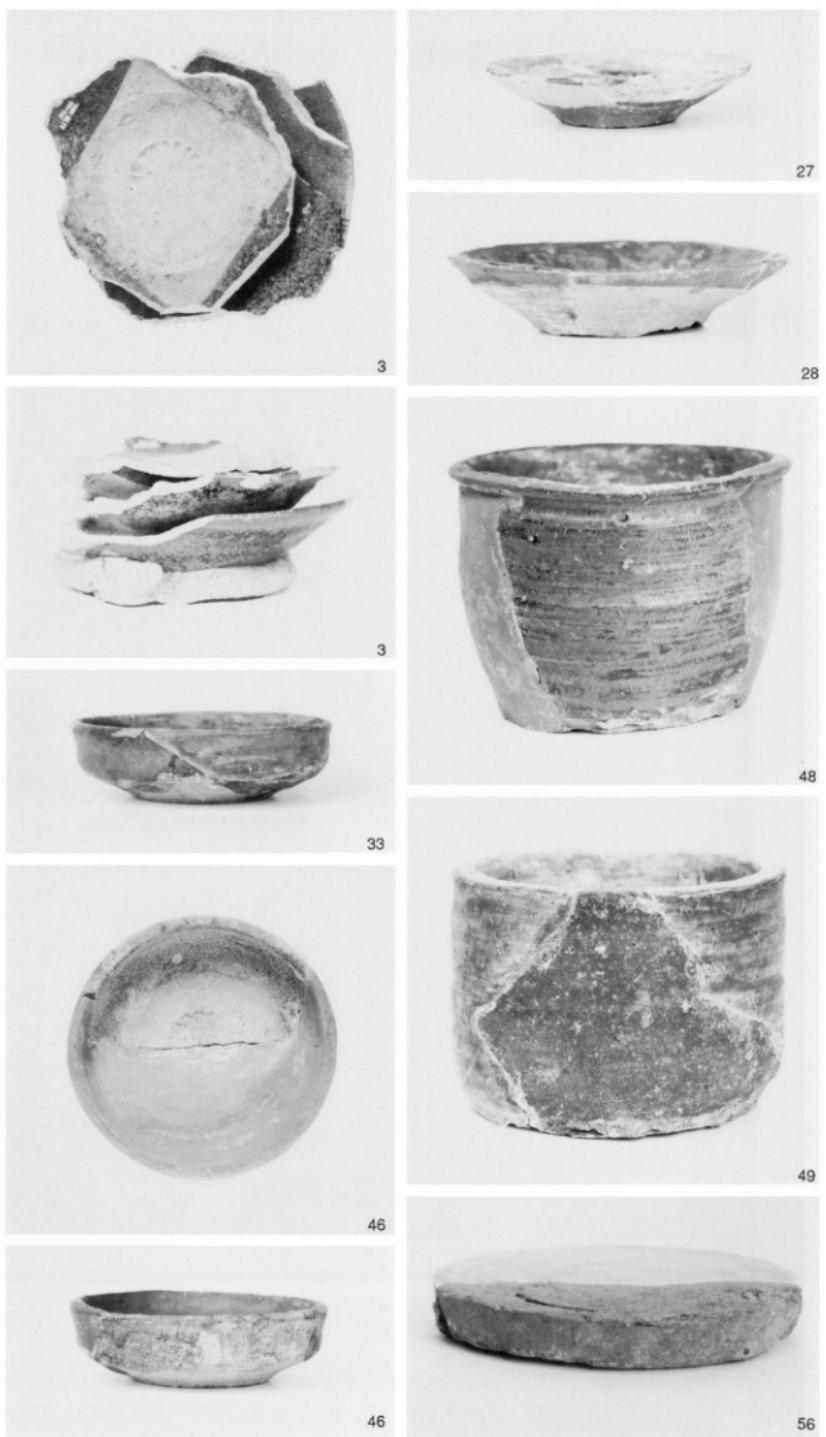


3. 遺物出土状況
(南から)



図版4

遺物写真
3・48・49. P2
33. P8
27・28・56. 包含層
46. 表採



図版5

遺物写真

5. P3

8~10・19. P4

1・2・4・13~15・

18・20. P5

7. P6



1



2



6



4



5



7



8



9



10



14



15



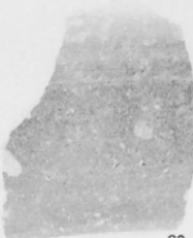
13



18



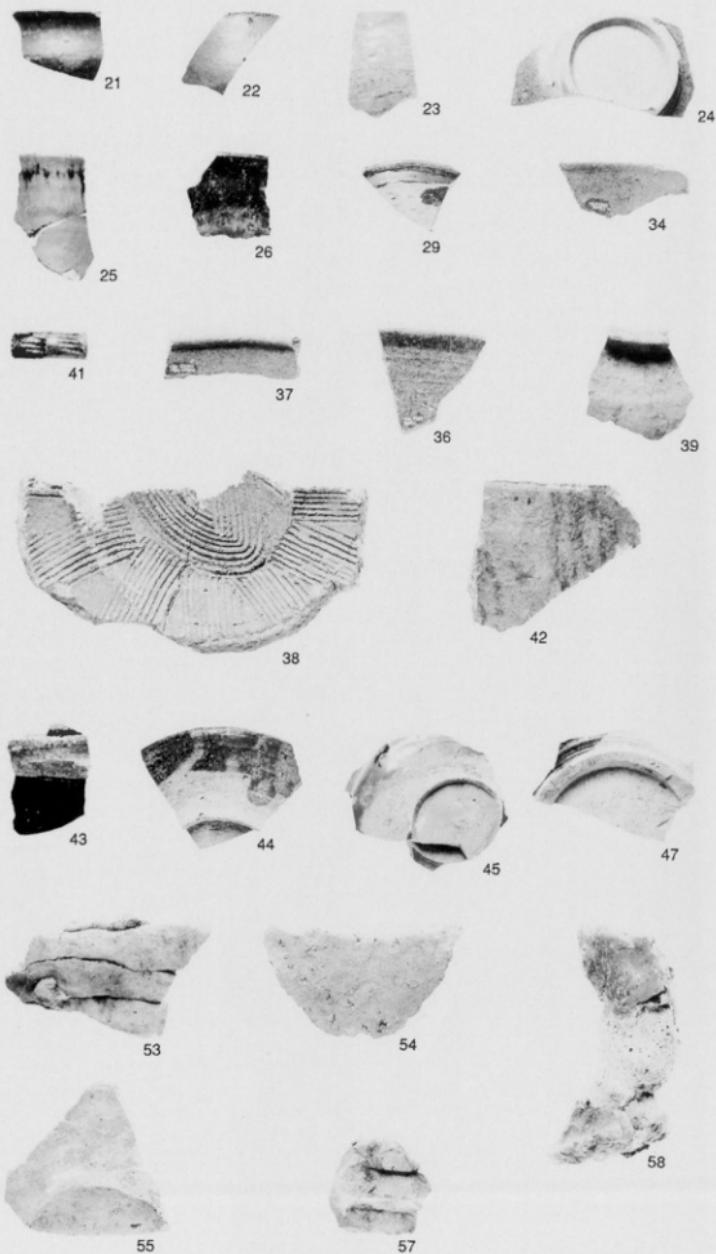
19



20

図版6

遺物写真
53・54・58. P5
55. P6
21~42・57. 包含層
43~47. 表探



報告書抄録

ふりがな	しんせとこよう						
書名	新瀬戸古窯						
副書名	県営土地改良総合整備事業上金剛寺地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査						
編集者名	三鶴秀典、渡辺樹						
編集機関	立山町教育委員会						
所在地	〒930-0292 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
発行機関	立山町教育委員会						
所在地発行	〒930-0292 富山県中新川郡立山町前沢2440番地						
発行年月日	西暦2001年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北。緯	東。経	調査期間	調査面積	調査原因
新瀬戸古窯	富山県中新川郡立山町瀬戸新	323	076	36° 38' 01"	137° 22' 01" ~	20000710 20000717	総合整備事業に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
新瀬戸古窯	生産跡	近世	なし	越中瀬戸焼			

新瀬戸古窯

—県営土地改良総合整備事業上金剛寺地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査—

立山町文化財調査報告書第32冊

発行日 平成13年3月30日

編集・発行 立山町教育委員会

印 刷 株式会社チューイツ

